



京大広報

No. 713

2015.7



「国際科学イノベーション棟」開所式を挙行 ー関連記事 本文4475ページー

目次

〈大学の動き〉

- 名誉教授称号授与について……………4474
- 名誉教授懇談会を開催……………4474
- 第62回京都大学未来フォーラムを開催……………4474
- 「国際科学イノベーション棟」開所式を挙行……………4475
- 総長主催「外国人留学生歓迎パーティー」を開催……………4475
- 山極壽一 総長がAPRU(環太平洋大学協会)第19回年次学長会議に出席……………4476
- 平成27年度双青戦の開会式を開催……………4477
- 第63回京都大学未来フォーラムを開催……………4477

〈寸言〉

- 多様な価値観を活かし、多様性を育てる
辻 徹……………4478

〈随想〉

- 多様性が生む研究の発展
名誉教授 小野 公二……………4479

〈洛書〉

- 迷走の効能
石井 美保……………4480

〈話題〉

- 国立大学法人八大学文学部長会議を開催……………4481
- JSPS「リスク評価に基づくアジア型統合的流域管理のための研究教育拠点」第9回ステアリング委員会を開催……………4481
- 山極壽一 総長によるMOOCオンライン講義配信を開始……………4482
- エコ〜ると京大2015〜初夏の陣〜を開催……………4483
- 全新生に一斉救命講習会を実施……………4484
- オリンピックオーク後継樹植樹記念式典を挙行……………4484
- 体育会ヨット部が創部80周年記念祝賀会を開催……………4485
- 体育会ボート部が新艇の命名式・進水式を実施……………4486

〈訃報〉……………4486

京都大学企画・情報部広報課

<http://www.kyoto-u.ac.jp/>

大学の動き

名誉教授称号授与について

6月1日(月)付けで山極壽一 総長から金谷利治 元教授(化学研究所)に京都大学名誉教授の称号が授

与された。

(総務部)

名誉教授懇談会を開催

6月22日(月)、百周年時計台記念館国際交流ホールにおいて名誉教授懇談会を開催し、81名の名誉教授の他、総長、理事、副学長、部局長等あわせて118名が出席した。

懇談会は、山極壽一 総長による本学の近況を交

えた挨拶に続いて、長尾 真 元総長による乾杯の発声により始まった。

会場では、出席者それぞれの在職当時の思い出や出来事、近況報告等に話が弾み、盛会のうちに執り行われた。



乾杯の発声をする長尾元総長



懇談会の様子

(総務部(総務課))

第62回京都大学未来フォーラムを開催

5月25日(月)、本学医学部卒業生、医師で高雄病院地域医療室長の川島 実 氏を講師に迎え、京都大学未来フォーラムが百周年時計台記念館において開催された。



講演する川島氏

「揺れてどこまで行くのやら」と題した講演の中で、川島氏は自らの体験を振り返り、医学部在学中にプロボクサーとしてデビューし、ボクシングの傍らでの子育てや、引退後は縁あって各地を転々としながら救急、地域医療に携わり、平成23(2011)年3月の東日本大震災に被災して気仙沼市の病院長として地域医療の立て直しに尽力されたことなどをユーモアを交えながら語られた。質疑応答では、多才な



会場の様子

生き方への様々な質問を受けて、今後の在宅医療への意気込みを語られるなど、参加者との熱のこもった対話となった。

参加者からは「先生はゆらりゆらりとして、ご縁のある方へ流れ、そこで自分らしく生活されていることはすごいなあと思いました」、「命の大切さを医療の世界で実践しておられることに魅力がありました」、「京大の卒業生らしくユニークな人生談を聴き、こんな生き方もあるんだと知ったことは、これからの自分の人生の参考になると思う」などの感想が寄せられた。

(総務部(渉外課))

「国際科学イノベーション棟」開所式を挙行

文部科学省「地域資源等を活用した産学連携による国際科学イノベーション拠点整備事業」により、吉田キャンパス内に「国際科学イノベーション棟」が完成し、その開所式が5月25日(月)に挙行された。当日は150名を超える学内外の関係者が参加した。

開所式では、最初に山極壽一 総長，土屋定之 文部科学審議官の挨拶があり，山下晃正 京都府副知事，門川大作 京都市長をはじめ学内外の関係者によるテープカットが行われた。

さらに，開所式に続いて施設見学会が行われ，和やかな雰囲気の中，参加者は新しい施設を見学した。

また，開所式後は本棟シンポジウムホールにて「活力ある生涯のためのLast5Xイノベーション拠点」による第3回シンポジウムを開催した。

今後は国際科学イノベーション棟を中心に，京都

の産官学が一体となって新たな産業の創出を目指す予定にしている。



テープカットの様子

(研究推進部(産官学連携課))



左から挨拶をする山極総長，土屋審議官

総長主催「外国人留学生歓迎パーティー」を開催

6月17日(水)，百周年時計台記念館において，総長主催「外国人留学生歓迎パーティー」を開催した。

この歓迎パーティーは昭和36年から開催されており，今年は，総長をはじめ，理事・副学長，部局長，指導教員および学外団体等の関係者など85名，および新入留学生364名が出席し，和やかな雰囲気の中，留学生を囲んで交流がおこなわれた。

山極壽一総長による，留学生への問いかけをふんだんに取り入れた歓迎挨拶の後，新入留学生を代表してオーストリア出身のバツハーネック・マーティンさん(日本語・日本文化研究研修生)が流暢な日本



新入留学生によるスピーチ

語と英語による御礼のスピーチを行い，北野正雄 理事・副学長による乾杯の発声によりパーティーは始まった。

また，恒例の歓迎イベントでは，本学ダンスチーム「彩京前線」による「京炎！そでふれ」の演舞があった。留学生を含む学生ダンサーたちは現代風にアレンジされた着物の衣装を身につけ，迫力ある踊りを披露し，会場は一気

に沸き立った。

続いて、ジャグリングサークルの「ジャグリング・ドーナツ」による演技が披露され、巧みでダイナミックな動きで留学生を惹きつけた。



本学ダンスチーム「彩京前線」による演舞「京炎！そでふれ」

その後は参加者が即興で舞台に上がり、歌やダンスを披露する場面もあり、皆でパーティーを盛り上げつつ、楽しみながら交流を深め、たくさんの笑い声の中、閉会となった。



「ジャグリング・ドーナツ」による演技
(教育推進・学生支援部(国際教育交流課))

山極壽一 総長が APRU(環太平洋大学協会)第19回年次学長会議に出席

本学が加盟するAPRU(The Association of Pacific Rim Universities: 環太平洋大学協会)の第19回年次学長会議が大阪市で開催され、本学からは山極壽一総長、稲葉カヨ 国際担当理事・副学長、森 純一 国際交流推進機構長、吉村成弘 生命科学研究科准教授および国際担当職員が出席した。

1日目午前の全体会議は、開催校の平野俊夫 大阪大学総長と、APRU議長のC. L. Max Nikias 南カリフォルニア大学長の挨拶に続いて、前川喜平 文部科学省文部科学審議官他の基調講演が行われた。また、日本の加盟大学の4学長と、松本英登 文部科学省高等教育局高等教育企画課国際企画室長によるパネルセッションで山極総長は、WINDOW構想と、京都大学ジャパンゲートウェイ構想を紹介、本

学が世界に誇る数学、化学、医学、人文社会科学等の研究分野を中心に日本のゲートウェイとして国際競争力を高める取り組みについて語った。

午後からは、「学長リトリート」と題した学長のみ参加のセッションで今後の大学界の取り組み、学長リーダーシップ等について議論されたほか、各大学代表教職員が参加するシニアスタッフセッションでは、森機構長がAPWiL(Asia-Pacific Women in Leadership: 女性リーダーシップ育成事業)について報告と提言を行った。

2日目は、ビジネスミーティングにて平成26年度財務報告、平成27年7月就任の理事会新メンバーの発表等が行われた。



出席者全員の集合写真

(企画・情報部(国際企画課))

平成27年度双青戦の開会式を開催

京都大学・東京大学の各運動部の総合対抗戦である双青戦の開会式が6月27日(土)、京都大学時計台記念ホールにて盛大に行われた。

最初に、宋 燁韜 実行委員長(京都大学)による開会宣言があり、続いて山極壽一 総長、小田滋見 体育会長、来賓の南風原朝和 東京大学副学長の挨拶があった。

酒井那乙斗 サッカー部主将(京都大学)による選手宣誓の後に、競技種目の紹介映像の上映が行われ、最後に、両大学の応援部・応援団によるユーモラスで力強い演舞演奏が行われた。

また、開会式後には、吉田南構内の生協食堂にて



応援部・応援団の演舞

レセプションが開催され、関係者一同なごやかな雰囲気の中、懇親を深めた。

(教育推進・学生支援部(厚生課))

第63回京都大学未来フォーラムを開催

6月22日(月)、本学文学部卒業生、NHKドラマ番組部 チーフ・プロデューサーの訓覇 圭 氏を講師に迎え、京都大学未来フォーラムが百周年時計台記念館において開催された。

「TVドラマの作りかた -プロデューサーの現場から-」と題した講演の中で、平成25年に放送され大ヒットになった連続テレビ小説「あまちゃん」の第1回放送の脚本を題材に、言葉の選び方や主役の見せ方などについて、プロデューサーの目線で丁寧に解説された後、15分の放送を視聴した。脚本の宮藤官九郎さんとの打合せで、田舎、町おこし、地元アイドル、ママもアイドルというドラマの原型が早くから決まっていたことなど、ドラマ制作の様々なエピソードが語られ、折りにふれ会場の学生達との対

話を交えながらの約90分の講演は、参加者の興味が尽きずたいへんな盛会となった。

参加者からは「セリフの中での言葉の選択や、言い回し、セリフの数などひとつひとつに込められた表現上の戦略を知ってからオープニングを見たとき、表現したいものが結実するのはこういうことなのかと感じて、とても胸が熱くなりました」、「宮藤さんの脚本家としてのすごさが、プロデューサー(制作統括)である訓覇さんの目から見た形で伝わりました」、「被災地の映像を見せないとか、本当に被災されたひと達をエキストラにするとか、しっかりとした信念があってすごいなと思いました」などの感想が寄せられた。



会場の様子



講演する訓覇氏

(総務部(渉外課))

寸言

多様な価値観を活かし、
多様性を育てる

辻 徹

劇団そとばこまち。かの辰巳琢郎氏が中興の祖と言われる京大生を中心とする関西屈指の小劇場劇団であった。学生時代、百万遍周辺よりも烏丸松原にあった劇団アトリエで、私は多くの時間を過ごした。



辰巳さんは滅多にお越しにならなかったが、甲斐田さん、松井さん、畑中さんなど4年以上年の離れた諸先輩、三沢さん、松浦さん、寺崎さんなど当時現役の諸先輩、そして小松や訓覇^{くるべ}などの同世代に加え、今や第一線で活躍されている俳優の生瀬勝久さん、声優の山崎和佳奈さんなど他校生も含み、個性的な京大生という言葉を超える刺激的な集団に属していたのだと、30年近くを経て、一般的な大学OB・OGの方々とお会いするに連れて、強く感じるようになった。建築系学科に属し理系的な明確な基準を重んじる私にとっては、人の感受性と言う不明瞭な領域に拘泥し、全力で夜通し個性をぶつけ合う芝居作りの為の激論は、摩訶不思議な異次元の学習の場であった。自分自身の視野を広げ、彼我の立ち位置や違いに配慮出来るのはこの経験のお陰だ。

舞台監督や照明スタッフとして活躍したが、3回生頃からは、そとばこまちだけではなく、今では全国区で人気を博す劇団新感線などにも活動範囲を広げ、卒業間際にはセミプロとして仕事を請け負い、大人に混じって働いた。京大生とは違う価値観の人たちとも触れ合いながら成長していく事が出来た。

大学卒業後は一転して三菱商事に入社。総合商社の人財も多様性に富んでいる事は驚きだった。各有名校の体育会の主将はごろごろしていたし、日本語よりも英語の方が得意な人など、枚挙に暇がない。そんな個性的なメンバーも数年も経てば三菱商事のDNAを身につけ、組織としての個性を身に纏う。

業務内容も多彩で多岐に亘る。ただ、いずれの仕事においても、目標をはっきりと見据え、クライアントの要望に応え、たくさんの企業を束ねるリーダーシップを発揮して仕事を進めていくところは共通している。

私はこの多様性に富む総合商社で、建設・不動産部門一筋に育ち、現在ではREIT運用会社の社長を務めている。商業施設や産業・インフラ施設、オフィスビル等を保有する3本のREITの運用を受託している。不動産金融という新しい分野だけに、社員は90%がキャリアと呼ばれる転職組、顧客の3分の1は海外の投資家だ。資産の取得先も事業会社から外資系ファンドまで様々で、テナントも国内の製造業から海外のラグジュアリーブランドまで。

ステークホルダーの関心事に共通項はない。

ただ、お客様に喜んで頂き結果を得ると言う意味では、劇団も総合商社もREITの運用会社も同じ。多種多様な価値観を持った仲間を束ねて、皆の力を最大限に発揮して貰えば良い結果に繋がる、という点も同じだ。

三菱商事やREIT業界にも沢山の京大卒業生がいるし、おかしなことに同じREIT運用業のCOOには当時のクラスメートさえいる。

様々な舞台で、たくさんのOB・OGが特異な存在感を放ちながら活躍している。

京大は、これからも多種多様で優秀な人財を、そして彼らの個性がぶつかり合う環境で育つからこそ身に着く多様性を束ねられる人財を、輩出していかなければならない。

そういった特徴を持つ、京大があるべき姿は、大学関係者や企業家だけではなく、劇団関係者や商社マンなども含めた、普段、大学教育にあまり関わりを持たない多様なOB・OGを交えて議論していくことで、多様性を重んじながら独自性を発揮する京大らしくも時代に即した姿が描けるのではないだろうか。

(つじ とおる 三菱商事・ユービーエス・リアルティ株式会社 代表取締役社長、平成2年工学部卒業)

随想

多様性が生む研究の発展

名誉教授 小野 公二

2年前に定年で退職したが、他の大学に勤務した2年半を除き、ずっと京都大学に在職した。サンフランシスコとエッセンでの研究生活も、京大教員の身分のままであったので、計36年余、京大にいたことになる。更に、医学部の学生時代を含めると42年余となる。退職後も、同じ原子炉実験所の寄附研究部門において研究を継続する機会に恵まれた。



筆者の研究は、原子炉などで得られる中性子の医学・医療への応用である。その中心は、低速中性子とホウ素原子の核反応によって放出される飛程の極く短い α 粒子を用いたがん治療(ホウ素中性子捕捉療法・BNCT)の研究である。ホウ素化合物が選択的にがんを集積すれば、略、選択的にがんの細胞を破壊できる。アイデアは80年近く前の、1936年に出されたが、大量の中性子を必要とするため、その試みは原子炉の出現を必要とした。米国で最初の臨床研究が始まったのは、第二次世界大戦も終わった1951年であった。しかし、結果は芳しくなく、臨床研究は1961年に打ち切りとなった。原因は幾つかあったが、用いたホウ素化合物のがんへの選択的な集積性が不良であったのと、中性子の純度が悪かった為のようである。米国で頓挫した研究は日本の研究者に引き継がれた。ホウ素化合物の研究、高純度中性子場の開発が行われ、1960年代の末から1990年代の前半までは、我が国でのみ、臨床研究が行われた。その成果に刺激され、米国で臨床研究が再開されたのは1990年代の中葉だったが、これまた目ぼしい成果を得るに到らず、現在、研究は休眠状態にある。1990年以降、日本で研究の中心となったのは原子炉実験所である。その理由は、研究用原子炉が在り、全国の関連研究者が中性子ビームを利用できること、そして、何よりも研究に責任を持つ研究部門が設置されていることである。比較的短期間のプロジェクトで研究を行ってきた米国や、研究に他国

の原子炉を利用しなければならなかったドイツのグループに比べると研究体制の安定性に格段の相違があった。

1990年代は基礎的研究でこそ、それなりの成果を積み上げたものの、耳目を集めるような臨床的成果を示すには到らなかった。米国でなら、そこで研究部門の消滅、研究方向の変更が不可避だったかもしれない。2001年に、他に治療法を見つけ難い再発頭頸部癌の患者にBNCTが劇的に奏功した。これは関連する世界の研究者の視野を変え、研究を一気に加速させた。研究の歴史を変えた症例との邂逅^{かいこう}であった。その後は比較的順調に研究は進展し現在に到っている。

顧みると、こうした研究を長年に亘って許す恵まれた環境に感謝せずにはいられない。医学は勿論のこと、工学(原子核)、理学(生物、化学)、農学などの多くの研究科・専攻と繋がる多様性に富んだ原子炉実験所にあって初めて、BNCTのような高度に学際的研究が可能であったと考えている。BNCT研究に不可欠な重水熱中性子設備は、そもそもBNCT研究の為に附設された訳ではない。しかし、当初に想定された目的とは違った研究で現在は活躍している。多様な研究者の集まりが、新たな領域の研究を生んだのである。これは、意図したものではなく、自ずからそうなった処が意味深い。多様性が更なる多様性を生んだと云える。BNCT研究は原子力研究の多様性の発露だが、その中から更に多様な研究が生み出せればと願っている。時代状況も現在よりもややゆとりが在って、成果の有無に比較的寛容であったように思う。インキュベーションに時間を要する研究を育むには寛容さが必要である。京都大学はこれまで先端研究を含む多くの優れた研究成果を生み出してきたが、それらは最初からそうだった訳ではない。10年後、20年後、更には30年後に結実する可能性を秘めた研究を育むには、多様性を許容する寛容さ、更に忍耐も必要であろう。それは他を理解する知の深さとも云える。更に、これらは、学術に特化したことではなく、社会の諸々の事象についても同様であろう。

(おの こうじ 平成25年退職、元原子炉実験所教授、専門は放射線腫瘍学)

洛書

迷走の効能

石井 美保

「洛書」というからには、たぶん京都にまつわるあれこれを書くことがふさわしいのだろう、とまずは考えをめぐらせてみた。私が京都に暮らすようになったのは、平成8(1996)年に京都大学大学院人間・環境学研究科に入学した時からなので、途中、他所にいた4年間を除いても、かれこれ15年近く住み続けていることになる。その割には、京都に住み慣れたという実感が希薄なのは、大学院に在籍していた時間のほとんどを海外で過ごしたからだろう。

修士課程に入学して間もなく、東アフリカのタンザニアに渡航した。一応、現地の精神医療の人類学的調査という目的を掲げていたものの、実際には、一度アフリカに行ってみようという思いつきからの渡航だった。精神医療の調査をするつもりが、路上で出会った都市出稼ぎ民の若者たちと親しくなり、彼らの多くが関わっていた「ラストファースト」と呼ばれる社会・宗教運動を調査することに。当時は若者たちとの年齢も近く、一緒に店番をしたり官憲から逃げたりしているうちに、人類学者であるというよりも単に彼らの仲間であるかのような感覚が強くなっていった。他方でいつの間にか、日本での生活や大学というものがまるで何か、遠い世界の絵空事のように感じられるようになっていた。

タンザニアではこのように、調査らしい調査もしないまま逡巡と迷走を続けていたのだが、日本に戻って何とか修士論文を仕上げ、迷いながらも博士課程へ。今度は西アフリカのガーナにフィールドを移して、精霊祭祀や妖術についての調査を開始することにした。精霊や妖術というと突飛に聞こえるかもしれないが、これらはいずれもアフリカ社会のリアリティを構築し、駆動するものとして長らく注目されてきた、人類学ではいわば「王道」のテーマであ



る。博士課程では、さすがに修士の頃よりも自覚的に調査に取り組んだが、それでもやはり、フィールドにいる間に自分の現実感覚が何かしら変わってくることは違いがなかった。かつて都市出稼ぎ民の生活世界に嵌り込んだように、今度は妖術や精霊祭祀のリアリティが自分を圧倒しはじめ、それにつれて自分が本来帰属していたはずの日本での生活がまるで現実味のない、虚構の世界であるかのように思われてくるのである。

やがて博士論文を何とか提出し、紆余曲折の後、平成22(2010)年に京都大学に戻ってくる機会をいただいた。そしてその翌々年からは、自分が卒業した人間・環境学研究科で学生を指導する立場になった。今、それぞれのフィールドと日本を往復しつつ、複数の「現実」の間で逡巡しているらしい学生の皆さんをみていると、同じように逡巡し、おそらくもっと野放図だったかつての自分の迷走ぶりがいかに危なかったものだったかに気がつく。同時に、自分がいまだにその危なかしさを払拭しきれていないことにも気づかされる。教員としてもっともらしく振る舞おうとしながらも、そうした自分に驚き呆れ、「わかったようなこと言っちゃって」と茶々を入れている自分がいる。大学という機構の中に居場所を見つけながらも、そうした現実を絵空事のように感じ、信じられないと驚きつづける私がいる。

目下、私は調査地をインドに移して毎年のようにフィールドワークに出かけている。それはもちろん調査として必要だから行くのだが、それに加えて「この現実」から少しでも距離をとり、その意外さに驚きつづけるために出かけるのだともいえる。人類学者としてフィールドと大学を行き来することは、だから両方の現実とその都度チューンを合わせつつ、いずれの世界のあり方にも驚きつづけることであり、いつまでたっても「不慣れであること」を極めることなのかもしれない。

(いしい みほ 人文科学研究所准教授 専門は文化人類学)

話題

国立大学法人八大学文学部長会議を開催

第63回(平成27年度)国立大学法人八大学文学部長会議が去る6月5日(金)に、京都大学文学部を当番校として京都ロイヤルホテル&スパで開催した。

同会議には、北海道大学、東北大学、東京大学、名古屋大学、大阪大学、広島大学、九州大学および京都大学の各文学部長ならびに大阪大学人間科学部副学部長(オブザーバー)が出席した。また、文部科学省からは、アドバイザーとして、三浦和幸 高等教育局国立大学法人支援課国立大学戦略室長および同課の堀 辰哉 事務官が出席した。

三浦室長から、「大学改革の動向等について」と題して、「大学改革に係る最近の動向」、「第3期中期



大学改革に係る最近の動向について説明を行う三浦室長



国立大学法人八大学文学部長会議出席者

目標期間における国立大学法人運営費交付金の在り方について(中間まとめ)のポイント」および「平成28年度国立大学法人運営費交付金概算要求について」等国立大学に係る多くの論点について、配付資料に基づき説明があった後、質疑応答が行われ、活発な意見交換が繰り広げられた。

また、同会議の協議事項「SGU事業あるいは教育の国際化をめぐる諸論点」、「国立大学における人文社会科学系部局の位置づけ」では、各大学の状況等が紹介された後、質疑応答が行われ、今後の各大学における取組みにとって、大変有意義なものとなった。

(大学院文学研究科)

JSPS「リスク評価に基づくアジア型統合的流域管理のための研究教育拠点」第9回ステアリング委員会を開催

工学研究科を日本側拠点機関、マラヤ大学をマレーシア側拠点機関として実施している日本学術振興会(JSPS)アジア研究教育拠点事業の一環として、5月21日(木)、マレーシア・ランカウイ島にて第9回ステアリング委員会の開催および視察を行った。

日本側は工学研究科からコーディネーターの清水芳久教授をはじめとする本事業運営メンバーおよび事務部職員の計15名が出席し、マレーシア側はコーディネーターであるマラヤ大学のNik Sulaiman 教授を中心に10名の出席があった。

一行は21日に第9回ステアリング委員会を開催

し、今年度の目標の確認および包括シンポジウムの日程を決定した後は各グループの代表者がそれぞれ昨年度の成果を発表した。

二日目はキリム・ジオパークを訪ね、約5億年前のオルドビス紀の石灰岩地層や鍾乳洞、キリム川をはじめとする三つの川の流域のマングローブ林などを視察した。

ランカウイ島は2006年に東南アジアで初めてユネスコの世界ジオパークに認定されており、世界的に貴重な地形や地質などに加えて、特徴的な文化・歴史を有する。

本事業は平成23年度から開始した5年間の事業で、本年が最終年度となる。

アジアでの流域管理・リスク管理に焦点を当て、流域において新たに発生することが予測される重要な課題に対しての解決策を見いだすと同時に、研究者・技術者のための教育プログラムを作成し、育成した若手研究者を次世代の指導者とすることで継続的な研究・人材育成が可能なりソースを築くことを目標とする。

今秋、京都大学桂キャンパスのローム記念館にて第5回包括シンポジウムが行われる。

本事業のメンバーが一同に会する最後の機会という



集合写真

こともあり、多数の研究成果発表が予定されている。

(大学院工学研究科)

山極壽一 総長による MOOC オンライン講義配信を開始

本学は平成25年5月以来、日本の大学としては初めて、ハーバード大学とマサチューセッツ工科大学(MIT)などの世界のトップ大学が参加する国際的MOOC協議会「edX」に参加し、MOOC(ムーク：大規模公開オンライン講義)の配信を行っている。

本年10月からは、山極壽一 総長によるMOOC「Evolution of the Human Sociality」(「人類進化論」)の配信を開始することとなった。

本講義は、本学で始まった霊長類研究の歴史的経緯や、山極総長がこれまで行ってきたゴリラを対象とするアフリカ大陸でのフィールドワーク研究等を通じ、人類の社会性の起源に迫る内容となる予定である。

edX・Coursera等のメジャーなグローバルMOOCプラットフォーム上で配信されているMOOCの数は、世界で現在1,500以上に上るが、現役の総長・学長が講師を務めるMOOCが大学を通じて正式に提供されるのは、総合大学としては世界で初めての試みとなる。

受講登録および配信開始時期

- ・配信開始：平成27年10月(6週間)
- ・受講登録開始：平成27年7月

下記のedXサイトより登録を受け付けている。

<https://www.edx.org/school/kyotoux>



紹介ビデオより

(高等教育研究開発推進センター)

エコ〜ると京大2015 〜初夏の陣〜 を開催

全員参加型で環境負荷を低減した持続可能なキャンパスの実現を目指す強化イベントとして、「エコ〜ると京大2015」を開催した。環境月間である6月にあわせ、1ヶ月間、吉田キャンパスを中心に様々な企画を展開した。

6月2日(火)から29日(月)の間は、京都大学生協ルネ1階に、「京都大学で環境学を考える研究者たち」のオープンラボが出現し、多様なアプローチで環境問題に迫る12名の研究者が日替わりで駐在した。今年は、マイカップでドリンクを楽しめ、フェアトレードコーヒーやはちみつドリンク、多国籍のお茶が提供され、会話をより一層盛り上げた。また、クスノキ染めやリメイク、風呂敷包み体験コーナー、エコアート作品も人気を博した。

15日の週は、京都大学生協カンフォアとの連携で「ナイルビールdeサステナブルナイト」と銘打った環境配慮型ビアガーデンを展開した。廃油と桂キャンパスの竹などを活用したエコキャンドルが彩を添えたほか、地(学内)産地消の食材やリユースカップなどが活躍した。19日(金)には、参加者とともに京都大学の創立118周年をキャンドルで祝った。

20日(土)には、百周年時計台記念館とその周辺で「くすちゃんフェスタ」(くすちゃんは、京都大学の環境取組のキャラクター)を開催した。1階百周年記念ホールでは、学内団体等がエコパフォーマンスを繰り広げたほか、ごみ削減をテーマとした特別シンポジウムを開催した。周辺では、様々な団体によ

るブースやチャリティーバザーが開かれた。歌あり、食あり、学びあり、動物とのふれあいありと、多様な環境問題との出会いに、多くの参加者が充実した1日を過ごした。

学内外の団体と連携した企画としては、エコクッキング教室や環境関連教材を開発するワークショップなども開催した。

また、SNSを活用して「1日1エコ(1つでも良いので環境配慮行動を実践することの積み重ねが重要であるとの想いをこめている)」を訴求するプロジェクトも展開した。1日1人(組)のエコメッセージをFacebook(<https://www.facebook.com/ecosengen>)で発信するものであるが、「ぬか漬け」をバトンに見立てて、つないでいった。天地返ししながら、個性豊かなメッセージが飛び出したが、同時に、ぬか漬けを始めとする保存食や食材の活用など、先人の知恵に想いを馳せる機会にもなった。

多くの関係者の協力により、1ヶ月間、様々な企画を行うことができた。多くの人に少しでも気づきや参加のきっかけを与えることができたと考えており、今後に繋げたい。

※「エコ〜ると京大」とは、エコ×世界(ワールド)からの造語であり、「Think globally, Act locally, Feel in the Campus!」のメッセージをこめると同時に、京大の中でエコを学ぶ学校(Écoleとはフランス語で学校)を期間限定で開校する意味もこめたものである。



創立118周年をエコキャンドルで祝う様子

(環境安全保健機構(環境科学センター))

全新生に一斉救命講習会を実施

4月2日(木)および4月6日(月)に、学部の新入生に対する学生支援機構ガイダンスが計3回行われ、そのガイダンスの中で、初めて新入生3,015人全員を対象とした救命講習会を実施した。

新入生たちは、30分間の講習の中で、二人ひと組になって心肺蘇生のトレーニング器「あっぱくん®」を使って実習を行い、各講習会におよそ70名の教員が援助した。

救命講習会を受講した後の学生のアンケートでは、「こういう講習会は大切だと思ったし、定期的で開催してもらえるとさらによいと思う」、「大学での部活は学生だけで活動することがほとんどなので、入学前にAEDの使い方を学ぶことは大切だと思った」といった感想が寄せられた。同時に救命講習会のサポートを行った教員からも、「教員にとっても、必要な講習ではないかと思った」、「学生に助けてもらうことになるかもしれないので、学生たちにもしっかり救命の方法を身に付けてもらいたい」などの意見が寄せられた。



救命講習会の様子

3,000人以上の新入生を対象に一斉に心肺蘇生法を教育するという取組みは前例がなく、今回が初の試みとなった。今後、新入生ガイダンスだけでなく、種々の機会に継続的に救命講習を実施していく予定である。

今回の救命講習会は、国際高等教育院の統括のもと、医学部人間健康科学系専攻、医学部附属病院救急部、同病院総合臨床教育・研修センター、環境安全保健機構の教員が共同で運営した。

(国際高等教育院)

オリンピックオーク後継樹植樹記念式典を挙行

陸上競技部OB・OG会(蒼穹会)は4月29日(水・祝日)、北部グラウンドにて、オリンピックオーク後継樹植樹記念式典を挙行了。昭和11(1936)年のベルリンオリンピックで、陸上競技の男子三段跳びにおいて京都大学陸上競技部のOBである田島直人氏が優勝し、優勝者へ贈られたヨーロッパナラ(ブナ科コナラ属: *Quercus robur* L.)の苗を、京都大学北部構内の理学部植物園に植えたものが後に北部グラウンドに移植され、樹高は20数メートルに達し、オリンピックオークと呼称された。

しかし、平成20(2008)年夏にカシノナガキクイムシの被害(いわゆるナラ枯れ)に遭い、枯死してしまったため、同年12月に伐採された。かつて京都大学農学部演習林職員らの手により、グラウンドのオ

リンピックオークの萌芽から採取し、育てられたとされるヨーロッパナラが北部構内の北白川試験地に2個体あり、井鷲裕司 農学研究科教授らによる遺伝子解析の結果、枯死した個体と同じ遺伝子を持つことが確認された。本年2月に1本を元の本が植えられていた場所に移植した他、もう一方の個体からの種子が発芽した実生も同地に移植した。

記念式典には小田滋晃 体育会長、現役陸上競技部員、OB・OGら約100名が出席した。田島氏の長女の小池和子 様からは「オリンピックオークを通じて再び父の存在を若い人に知ってもらえて嬉しい」と挨拶をいただいた。また、現役部員からは「先輩の偉業を思い起こし、高い目標を持って頑張りたい」といった声が寄せられた。

また、伐採の際に保管していた初代オリンピックオークの枝は、現役部員の手でコースターとして再

生され、後継樹植樹記念式典にあわせて関係者に配布された。



式典参加者による記念写真

(教育推進・学生支援部(厚生課))

体育会ヨット部が創部80周年記念祝賀会を開催

体育会ヨット部は今年5月に創部80周年を迎え、5月23日(土)に記念祝賀会を琵琶湖の観光船上で開催した。創部記念祝賀会は60周年以降5年ごとに開催しており、今回は現役・父兄・OBOGの他、他大学のヨット部関係者など約250人が参加した。

甲板上での記念式典は、祝賀会実行委員長の開会の辞、応援団のリードによる学歌斉唱、ヨット部長の増田 開 エネルギー理工学研究所准教授の式辞ののち、山極壽一 総長からの祝辞を阪上雅昭 学生担当理事補・人間・環境学研究科教授が代読した。



甲板上での記念式典の様子

続けて、船内のパーティーでは来賓の挨拶、乾杯ののちそれぞれが思い出を語り合い、パーティーの後半にはアルパ奏者である丸田恵都子 氏によるミニコンサートが行われた。

その後、再び甲板上で応援団から応援歌とエールを受けたのち、現役部員のリードで「琵琶湖周航の歌」を参加者全員が肩を組んで歌い上げ、最後に藤田修平 主将が高らかに決意表明を行った。

参加者は5年後の再会を誓い、盛況のうちに終了した。



決意表明を行う藤田主将

(教育推進・学生支援部(厚生課))

体育会ボート部が新艇の命名式・進水式を実施

体育会ボート部に大学が購入した2隻の新しい艇が届き、6月7日(日)に命名式・進水式を大津市のボート部艇庫で実施した。

式には、松本 紘 前総長、中村佳正 部長(情報学研究科教授)、現役部員、荒木裕次 監督、OBなどが参加し、松本前総長、吉田 保 OB会長などからの現役部員を激励する挨拶に続けて、荒木監督、岡田和歩 主将、山本裕子 女子部主将がそれぞれ決意表明を行った。

命名式で男子エイトに「京(ケイ)」, 女子クォドルブル(フォア)に「舞鶴」と命名されたことが披露され、進水式の儀式ののちそれぞれのクルーが漆黒の2艇を瀬田川に浮かべ、濃青のオールの感触を確かめた。

新しい艇は6月末に戸田オリンピックコースで開催された東京大学との対校競漕大会を皮切りに今後、各大会に出場する予定で、好成績と記録更新が期待される。



瀬田川に浮かぶ「京」(奥)と「舞鶴」(手前)

(教育推進・学生支援部(厚生課))

訃報

このたび、樋口隆康^{ひぐちたかやす}名誉教授、山本常信^{やまもとつねのぶ}名誉教授、岩井壯介^{いわい そうすけ}名誉教授、岡野正彌^{おか の まさや}名誉教授、小林道夫^{こばやしみちお}名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に各氏の略歴、業績等をご紹介します。

樋口 隆康 名誉教授



樋口隆康先生は、4月2日逝去された。享年95。

先生は、昭和18年京都帝国大学文学部史学科を卒業後、京都大学文学部講師を経て昭和32年に助教授に就任。昭和50年に教授に昇任され、史学科考古学講座を担当された。昭和58年に停年退官され、名誉教授の称号を授与された。

退官後は、財団法人泉屋博古館長、奈良県立橿原考古学研究所長、シルクロード学研究センター長、京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長、財団法人寧楽美術館理事長、斑鳩町文化財活用センター長などを歴任された。

先生は、中国考古学を中心とする東アジア考古学および中央アジア考古学において、数多くの業績を残された。中でも、東アジア各地で出土した青銅鏡の集成・分類研究が著名である。また、京都大学中

中央アジア学術調査隊隊長としておこなったアフガニスタン・バーミヤン石窟の調査(昭和45~53年)は、世界的に評価されている。先生は、普及書の執筆やテレビ・新聞などにおける解説を通して、考古学の普及にも尽力された。

以上のような優れた業績により、NHK放送文化賞(平成元年2月)、大同生命地域研究賞(平成7年7月)、福岡アジア文化賞(平成9年9月)、朝日賞(平成14年1月)などを受賞された。

(大学院文学研究科)

山本 常信 名誉教授



山本常信先生は、5月18日逝去された。享年94。

先生は昭和17年9月大阪帝国大学理学部物理学科を卒業し、京都帝国大学助手、京都大学講師、同助教授を経て、昭和32年3月同理学部教授に就任し、同学部化学科において量子化学講座を担当し、昭和59年停年により退官され、名誉教授の称号を授与された。同年4月広島工業大学教授となり、平成2年3月定年により退職された。

先生は永年にわたって理論化学の研究・教育に努め、理論化学の広い分野にわたり50編を超える研究論文と著書を公表している。なかんずく(1)非可逆

過程の統計力学を応用した化学反応速度の理論では、その速度定数にミクロレベルでの時間相関関数を用いた一般的かつ厳密な表現(山本公式)を与えた；(2)最も基本的な物質である固体メタンの構造と物性の全体像を把握するための量子統計力学的理論の確立；(3)液体の水の特異な熱力学的性質を、独自の発想によるモデルを用いた計算機実験によって再現した；などは世界的に高く評価されている。また数多くの人材を輩出し、学問の進歩に貢献された。

本学在任中は学生部長などの要職を務められた。

これらのご業績により、勲三等旭日中綬章を受けられた。

(大学院理学研究科)

岩井 壯介 名誉教授



岩井壯介先生は、5月28日逝去された。享年85。

先生は、昭和29年3月京都大学工学部電気工学科を卒業後、同大学大学院工学研究科修士課程電気工学専攻に進学され、同31年3月同課程を修了された。同年4月から三菱造船株式会社に入社、昭和32年5月京都大学工学部電子工学科助手に採用され、同37年2月同講師を経て、同39年9月には、京都大学から工学博士の学位を授与された。昭和40年11月同助教授に任ぜられ、昭和49年11月同教授に昇任し、工学部機械工学第二学科精密計測工学講座、昭和50年4月からは

精密工学科システム工学講座を担当して多数の優れた人材を育成された。平成6年3月停年退官され、同4月名誉教授の称号を授与された。この間、大学人として多くの学生の教育と研究者の指導にあたり、大学・研究科内においては各種委員・委員長をつとめ、大学組織の運営にも尽力された。本学退職後は、平成6年4月から平成15年3月まで名城大学理工学部教授となり、教育研究の場を私学に移して教育・研究に尽力された。

先生はシステム制御工学、生体工学、知識情報処理の幅広い分野において、多数の独創的かつ先駆的な研究業績を挙げられ、大学外においては、計測自動制御学会理事、システム制御情報学会理事、日本

ファジィ学会(現日本知能情報ファジィ学会)理事として学界の発展に貢献されるとともに、各学会の研究分科会主査、国際自動制御連盟会議および国際ファジィシステム学会国際会議などの実行委員・組織委

員として、多くの産学官交流の場での事業企画と運営に尽力された。これら一連の教育研究活動、学界活動により、平成25年5月瑞宝中綬章を受けられた。

(大学院工学研究科)

小林 道夫 名誉教授



小林道夫先生は、6月2日に逝去された。享年69。

先生は、昭和44年に本学文学部哲学科を卒業し、修士課程を経て博士課程を学修認定退学されたあと、パリ第4大

学後期博士課程に進学し、昭和52年にはコレージュ・ド・フランス哲学講座助手に採用された。ご帰国後は昭和55年に大阪市立大学文学部専任講師に採用され、助教授を経て平成6年に教授に昇任された。平成16年、京都大学大学院文学研究科(西洋近世哲学史専修)に教授として着任され、平成21年に定年退職され名誉教授の称号を授与された。

先生はわが国のデカルト研究の第一人者であり、ご業績はフランス本国でも高く評価されている。『デカルト哲学の体系』(1995)、『デカルトの自然哲学』(1996)、『デカルト哲学とその射程』(2000)、『デカルト入門』(2006)はわが国の西洋哲学史研究上の金字塔である。現代哲学の造詣も深く、『科学哲学』(1996)、『科学の世界と心の哲学』(2009)は豊富な哲学史的学識を踏まえた比類のない著作である。

これら業績に対して平成13年には第13回和辻哲郎文化賞および日本学士院賞が授与され、平成25年には日本学士院会員に選ばれた。

(大学院文学研究科)

岡野 正彌 名誉教授



岡野正彌先生は、6月8日逝去された。享年94。

先生は、昭和22年3月京都帝国大学工学部工業化学科を卒業され、同大学院特別研究生を経て、同28年4月に京都

大学講師に採用され、同30年助教授に昇任された。昭和31年化学研究所に配置替えとなり、同42年10月同研究所教授に昇任され、石油化学研究部門を担当された。その後、昭和59年4月に停年退官され、名誉教授の称号を授与された。退官後は、昭和59年4月に京都職業訓練短期大学校長に就任され、4年間にわたり勤務された。

この間先生は、高分子やアゾ染料合成時の有機反応を中心に、これらの反応機構を速度論的に解明す

ることに成功された。さらに、これらの知見を有機合成反応に展開され、アンチモンなどの無機金属塩、タリウムなどの有機金属化合物、セレンなどの有機半金属化合物を利用した、独特な選択性を有する合成反応を開発された。これらの業績により、昭和58年2月に有機合成化学協会の協会賞を受賞された。

先生は教育の面でも、深い学識と研究で得た経験をもとに大学院生や学部学生の指導に尽力され、多方面にわたる人材を育成された。また、有機合成化学協会理事および評議員を務めて協会の運営に携われ、その発展に多大な貢献をされた。

これら一連の教育研究、学会活動により、平成7年4月に勲三等旭日中綬章賞を受けられた。

(化学研究所)